

一〇年目の写真

カイロの知り合いを介して転送されてきた、そのくしゃくしゃのエアメール封筒に書かれた君の名前を見たとき、正直なところ、それがだれか思い出せなかった。考えてみれば当然のこと、あの頃、ぼくは君のほんとうの名前など知らなかったのだ。

差出人が君だとわかったのは、同封されていた写真を見たからだ。写真といっても、記念写真のような思いついたものではない。モノクロのプリントに写っていたのは、ほとんど廃墟といってよい、崩れかけた建物の中庭のような場所だった。

それは多くの記憶の中にはない場所だった。どこなのか。なんの建物なのか。封筒の中身はこの殺風景な写真一枚で、手紙もなかった。写真の裏に数列のようものが書き込まれていたけれども、どうやらそれは列車かバスの時刻のメモのようで、メッセージというわけではなさそうだった。

それでも、その写真に映ったがらんとした風景を眺めるうちに、ぼくは、それが君の撮影した写真ではないかと思つたのだ。そして写真を見つめるうちに、その思いはしだいに確信に変わった。

もう一〇年も前になる。いまではもう潰れてしまったカイロの安宿で、君は南に下るべく隣国のビザを申請していた。あの頃は本国照会というややこしい制度があったものだから、旅行者たちは何週間も足止めを

食わされていた。君もその一人だった。

君の風貌に特異なものを感じていたのは、ぼくだけではなかった。つるつるに剃り上げた頭は日焼けして黒光りしていた。からだは細いながらも、色褪せたTシャツからはみ出た首や肩の筋肉の付き方は、鍛えられた鋼を思わせた。骨張ったごつい顔は日本人には見えなかった。

ぼくと部屋をシェアしていたバイク乗りのアメリカ人など、君のことを、あいつはテロリストだよ、まちがいないね、オレは本國で特殊部隊にいたことがある、だからわかるんだ、あの身のこなしは訓練されたものだよ、テロリストにまちがいないよ、といった。

むしろ、それはとんだ濡れ衣だけど、君の風体や仕事に、そうした幻想を抱かせる暗い影のようなものがあったのは事実だ。君は話していて、けつして目を合わせようしない。歩くときは、なにかを恐れているかのように、たえず後ろを振り向き、足下や頭上にまでせわしなく視線を泳がせていた。

それはたんに君が人並みはずれてシャイであるからだ、あとになってわかった。それよりぼくが驚いたのは、君が以前は日本でファッション・モデルの撮影を仕事にしていたと聞いたときだった。いまの君からはとても想像つかなかった。君は仕事を三年つづけ、そのあとパリに渡って、同じような仕事をしていたと聞いた。

仕事は順調だったが、君は疲れていた。いっしょに暮らしていた女の子と別れたのをきっかけに、君は休暇をとって旅行に出た。行き先はモロッコだった。

泊まっていた宿のそばに、一日中なにもしないで座っている老人がいた。君は、その老人を毎日眺めていた。こうやってなにも生かされるんだな、

有名になったり、人どちがったことをして、評価されるのではない生き方があるのだな、と君は思った。

そのあと、どこかで寝転がって空を見た。あとからあとから雲がやってきては、流れ去ってゆく。それを見ているうちに、君はとても気分が良くなった。自分も雲になって、形を変えながら流れてゆく気がした。君はパリに戻り、アパートを引き払い、仕事をやめた。野原に立つ一本の木と、戦場でいまにも死にかけている人間と、なにがちがうのだろう。どちらも、ともに悲惨で、ともに美しい。地上にはこういうものが無数にある。それらを同じ地上に存在するものとして淡々と撮りたくなった、と君は思った。

君が向かったのは、あるうことかソマリアの難民キャンプだった。エチオピア東部の国境から国連の車輛でキャンプに入った。携えていったのは、パリで使っていた大判の6×6型のカメラ。難民キャンプに取材に来たジャーナリストのだけれど、ハンディな一眼レフで難民の写真を撮りまくっていたのに対し、君は重い三脚の上に6×6のカメラを据えて撮影を進めた。難民の写真だけではなく、キャンプから見える空や雲、鳥や灌木といった、ほかのジャーナリストたちが目もくれないもので、一つひとつ拾い上げるように丹念に撮影していった。

できあがった写真はそれなりにいいものだった。しかし、写真と、自分の日に映じたものとの間には微妙なずれがあった。地上に何があろうと、その上にはたえず雲がかたちを変えつつ流れている。映像に映し出された悲惨や傷みの向こうにも、そんな変わらぬ世界が存在することを、君の目は見ていた。それを自分の満足のゆくかたちでとらえたいと君は考えた。

そこで君はレンズの改造に取り組んだ。既製のレンズは、精度はいいけれど、その精度の良さゆえに抜け落ちてしまうものがある。人がそれぞれがう目をもつように、自分の日に合わせたレンズが必要だった。君はパリに戻り、中古レンズを分解しては玉を取りだして改造を重ねた。そうやって自分仕様のレンズを十本以上組み立てた。

君は、宿の部屋で、今回の旅に携えてきた改造レンズを見せてくれた。一見すると、変哲のないレンズだった。しかし、君がいうに、焦点距離は四〇ミリ。ピントが合うのは中央だけで、周囲はぼける。ハレーションを補正するフィルターをつけるため、明るさは約四段階落ちる。撮影のとき、絞りはつねに開放で、シャッター速度はいちばん速くても一二五分の一。たいてい三〇分の一以下で撮る。

話を聞いてみると、どこがいいのかまるでわからない。けれども君は、このレンズは見たものを自分の目に映ったそのままにもっとも近い姿で写しとってくれる。何十本もレンズをつくってみたけれど、自分の目に映るものを、いちばんきちんとすくいとってくれるのが、いまのところこのレンズなんだといった。

君の自作レンズを装着したニコンF Eのファインダーを覗かせてもらった。心なしか緊張したのは、もし君のいうとおりだとしたら、このファインダーをとおして、ぼくは君の内なる風景を覗き込むことになるからだ。黒く囲まれたF Eのファインダーは、死者の写真を縁取る枠のように思われた。その枠の中で、君は照れくさそうな笑いを浮かべて下を向いていた。

その後、君の姿がしばらく見えなくなった。一週間ほどして帰ってきた君は、いつそう日焼けしていたが、急に痩せたようにも見えた。

砂漠に行っていたと君はいった。数十枚のエイシェ（エジプトパン）と一〇本あまりのミネラルウォーターを持って、砂漠を南下するバスに乗った。途中下車した君は、砂に穴を掘ってエイシェとミネラルウォーターのボトルを埋め、その上に目印になるよう石を積み、それから砂漠を歩きまわって写真を撮った。夕方、石積みのあるところに戻ると、砂を掘り返して、エイシェを食べ、水を飲んだ。そうやって三日間、誰とも会わ

ことなく砂漠の写真を撮り歩いた。

しかし、ぼくがきみの話をどのくらい理解していたかという自信がない。だいいち、君は自分の撮った写真を一枚も持ち歩いていなかった。野心がないのか、たんに必要なかったからなのかはわからないが、ともかく君の写真については想像するはかなかった。

それでも、きみができあがった写真にあまり執着していないのは、なんとなくわかった。君の話を知っていると、君が写真を撮るのは、作品のためではなく、見るという行為に、ひたすら誠実であろうとしているためではないかと思えたものだ。

ソマリアからの帰りに、君はエチオピアを旅行した。地方の空港から町に向かうタクシーに乗ったとき、乗り合わせた身なりのよいエチオピア人女性が、食い入るように窓の外の風景を見つめているのに、君は気がついた。木々のまばらな赤土の大地は、すっかり見慣れた風景だったけれど、彼女はその風景から目を離さずとしなかつた。

タクシーは町に入る前に、山の中腹へと向かい、やがて一軒の家の前で停まった。家の中から飛び出して

きた老女は、タクシーから降り立った彼女を目にするや声を上げて泣き出した。君は周りのひとの話から、彼女が難民で、スーダンを経てアメリカに亡命し、じつに九年ぶりに故郷に帰ってきたことを知った。

君が気になったのはタクシーの窓から風景を見つめていた彼女のまなざしだった。君はカメラのファインダーをとおして、彼女のような視線で、この世界に向き合おうとしていたことに気がついた。それは地上の存在を無条件に肯定しようというまなざしだった。カメラはそのための道具にはかならなかった。

はたして君がそんなまなざしを手に入れられたのかどうかは知らない。その後まもなく君は南へと下り、それきり音信不通になってしまったからだ。

それから一〇年もたつていながら、しかも君の写真なんていちども見たこともないのに、これが君の撮った写真にちがいないと思つたのはなぜなのだろう。正直なところ、自分でもわからない。それでも、見れば見るほど、これは君の撮った写真にしか思えないのだ。とはいえ、そこに映っている廃墟がなにを表しているのか、ぼくには見当もつかない。ただ、いえることは、これは見かけとは裏腹に喜ばしい写真なのではないか、という印象だった。なぜそう思うのかと訊かれると、これもまたうまく答えられないし、そこに少しばかり自分の願望が含まれているのも否定しない。それでも、この写真から、ぼくはなにかを言わなければならない律動をおぼえてしまう。

君は階段を上って、屋上に出たのだろうか。そこからなにを見たのだろうか。枯れた草原だろうか、コーラの響く町だろうか、風の痕跡を刻んで波打つ砂漠だろうか、それともや真昼の光に燃えたつ海だったのだろうか。

君はこの手紙をポーランドから投函した。冷たく澄んだ光に満ちた早春のワルシャワ、そしてこの写真、その裏に走り書きされた時刻表、たったそれだけのことが、一〇年という時の厚みをまたいで、濃密な想像をかきたてる。君からつぎの写真が届くのは、いったいつのことだろう。